〔東京家政大学研究紀要　第51集 (1), 2011, pp.113～120〕

女子大学生における親準備性の発達（３）
－2年進学時のソーシャルスキルについて－

井森　澄江*，岩治　まとか**

（平成 22 年 10 月 7 日受理）

Development of Readiness for Parenthood in Students of a Women's University（３）：
Examination of the Social Skills of Students Just Beginning Their Second Year in the University

IMORI, Sumie and IWAJI, Madoka

(Received on Octorber 7, 2010)

キーワード：女子大学生，親準備性，ソーシャルスキル
Key words：Students of a Women's University, Readiness for Parenthood, Social Skills

要旨

本研究は大学で学ぶ４年間で，青年女子がどのように「保護される立場」から「保護する立場」に成長していくのかを明らかにしようとするものである．本報告では，２年生に進級した女子大学生のソーシャルスキルを，大学生としての１年間の学生生活との関連から検討していく．

対象は80名の女子大学生．入学時に愛着，養護性，ソーシャルスキルに関する項目からなる質問紙調査を実施．２年進学時に養護性，ソーシャルスキルに関する項目に加え，大学に入って１年間の勉学，対人関係（大学内での対人関係，大学外での対人関係，家族との対人関係）の充実度を問う項目からなる質問紙調査を実施した．

その結果①１年入学時において，「主張性」を除いて相川ら（2005）の２～４年の平均得点と差がみられなかったソーシャルスキル下位尺度得点は，２年進学時においても，個人では変動はあったものの，平均得点として差は示されず，１年と２年で変化はなかった．②大学での勉学の充実度とソーシャルスキルには関連がみられた．勉学がまあまあ充実していた群はあまり充実していなかった群よりソーシャルスキル得点が高かった．③大学内の対人関係の充実度とソーシャルスキルにはより明確な関連がみられた．大学内の対人関係がとても充実していた群はまあまあ充実していた群，あまり充実していなかった群よりソーシャルスキル得点が高かった．④しかし，大学外の対人関係の充実度および家族との関係の充実度とソーシャルスキルについて関連はみられなかった．

すなわち，大学入学時点と１年後でソーシャルスキル平均得点としては変化がなかったことが示された．また，大学入学１年間の勉学の充実度，大学内対人関係の充実度が２年進学時のソーシャルスキル評定に大きく反映されていることが示唆された．

＊人文学部教育福祉学科　発達心理研究室
＊＊人文学部教育福祉学科　教育福祉学科資料室

目的

本研究は大学で学ぶ４年間で，今日の青年女子がどのように「保護される立場」から「保護する立場」に成長していくのか．どうやって「保護する立場」に必要な力＝親準備性を身につけていくのかを明らかにしようとするものである．大学に入学した１年生が４年になるまで毎年４月に，また４年次には卒業時においても質問紙調査を実施，その成長を追跡していく．

報告（１）（井森・岩治 2009），報告（２）(岩治・井森 2009）では，大学に入学した直後の女子大学生の，幼児期，中学高校期そして現在の親を中心とした愛着関係のあり方および現在の親準備性（主に，ソーシャルスキルや養護性）について検討した．報告（１）では特にソーシャルスキルについて，幼児期から大学生になった現在までの愛着関係のあり方との関連から検討を行い，愛着およびソーシャルスキルに関して次のことが考察された．

①愛着に関して：大学入学直後の愛着IWMに関してはアンビバレント得点が最も高く，大学2年生（女子）のデータ（岩治ら 2008）に比較して，安定がやや低く，アンビバレント傾向にあった．IWM尺度は親子関係そのものに関する項目というより対人関係に関する項目からなっていることを考えると，この結果には，大学入学という大きなライフイベントを経験している最中で，環境に十分に適応

していないことが影響していると思われた．ただ，今回の対象者の特徴ということも考えられ，このことについては今後の追跡調査でさらに検討することとした．②ソーシャルスキルに関して：大学2〜4年生（男女）のデータ（相川ら2005）に比較して主張性得点はやや低いがそれ以外（関係開始，解読，関係維持，記号化）の得点はほぼ等しかった．これには対象が1年生ではあるが，女性であることが関係している可能性が考えられた．③ソーシャルスキルと愛着との関連に関して：ソーシャルスキルと現在の愛着IWM安定に強い正の相関（r=.80）がみられた．また，就学前安定（r=.37）とも正の相関が認められた．逆にIWM愛着アンビバレント（r=－.50）とは中程度の負の相関が，IWM回避（r=－.25），中高校期のIPA疎外（r=－.21）とは弱い負の相関があった．愛着の安定性がソーシャルスキルのベースになっていることが示唆された．

今回は，2年に進級した女子大学生の親準備性（ソーシャルスキルや養護性）に関して，大学生としての1年間の勉学や友人関係を中心とした学生生活との関連から検討していく．報告（3）ではソーシャルスキルに焦点をあて，勉学の充実度，学内・学外の対人関係充実度との関係をみていく．

本報告（3）の具体的目的は　以下の通りである．

①入学当初の女子大学生のソーシャルスキルと1年後すなわち2年進学時のソーシャルスキルを比較し，その変化について考察する．

②大学に入学してからの1年間の学生生活の様子を，勉学および対人関係，＜学内での対人関係，学外での対人関係，家族との関係＞の充実度の観点から捉える．

③2年に進級した女子大学生のソーシャルスキルと大学に入学してからの1年間の学生生活（勉学，対人関係）の充実度との関連について考察する．

④大学前期におけるソーシャルスキルについて検討し，親準備性としてのソーシャルスキルの発達について考察する．

方法

1．対象者

首都圏のA女子大学生95名（すべてこの研究の対象者になることを同意）．第1回調査時において1年生に在籍，年齢18〜19歳．第2回調査時において2年生に在籍，年齢19〜20歳．

2．実施時期

第1回調査2009年4月上旬，第2回調査2010年4月上旬

3．実施方法

第1回調査は入学時，第2回調査は進級時のオリエンテーションの最後に，調査への協力を依頼し，質問紙を配布，その場で回答してもらった（回答時間は20分程度）．

4．質問紙の構成

第1回質問紙は

①フェイスシート：学籍番号，年齢，家族構成，育った環境，母親の就労状況，年下の子どもの世話経験など　②文章完成を求める項目：私にとって母とは（父とは，友だちとは，尊敬する人とは）に続く文章を各3つずつ作ってもらう　③就学前の母子関係尺度（酒井2001のうちの）9項目，中学高校時代の親との関係尺度（IPA井上ら2006）18項目，IWM尺度（戸田1988）18項目　④養護性尺度（岩治2004）63項目　⑤成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（相川ら2005）35項目（関係開始尺度8項目，解読尺度8項目，主張性尺度7項目，感情統制尺度4項目，関係維持尺度4項目，記号化尺度4項目）　⑥Q-U 20項目中の9項目からなる．

③④⑤⑥は4段階評価（1．全くそう思わない〜4．非常にそう思う）を用いた（井森ら2009参照）．

第2回質問紙は

④養護性尺度63項目⑤成人用ソーシャルスキル自己評定尺度35項目に加えて，大学に入って1年の間の勉学および対人関係〈大学内での対人関係，大学外での対人関係，家族との対人関係〉の充実度の4段階評価（1．ぜんぜん充実していなかった〜4．とても充実していた）とその理由および「大学生という時代において何を一番大切にしたいか」「2年生としての抱負」についての自由記述からなる．なお，第2回質問紙では学籍番号の記入を求めた．

結果と考察

今回は，第1調査質問紙および第2調査質問紙への各尺度にすべて回答していた80名を分析対象者とした．

1．大学入学1年後のソーシャルスキル得点

本研究で用いる成人用ソーシャルスキル自己評定尺度(2005）は6つの下位尺度からなる．今回の2年生に進級した時点の各下位尺度得点の平均値とソーシャルスキル(SS)得点の平均値を，1年入学時点および相川ら（2005）の大学2年生以上（1002名男性435名，女性567名）の値と比較できるように表1に示した．なお，6つの下位尺度のうち「感情統制」は他の尺度と比べて，「対人不安」「抑うつ」との相関が弱い．尺度全体とも相関が低い（r=.18）．「記号化」とは負の相関関係（r=－.31）にあったことなどから，「感情統制」尺度の項目を除いた5つの下位尺度で，合計点を出す方法が相川ら（2005）によって提案されてい

表１　ソーシャルスキル下位尺度平均値

	2010.4〔2年進学時〕	2009.4〔1年入学時〕	2005〔2～4年〕
下位尺度	平均値（SD）	平均値（SD）	平均値（SD）
関係開始（8項目）	20.03（4.59）	19.93（5.25）	19.84（5.10）
解読（8項目）	21.03（3.35）	21.45（3.26）	21.75（4.16）
主張性（7項目）	16.14（4.05）	16.11（3.68）	17.34（3.42）
感情統制（4項目）	9.09（2.27）	9.49（2.52）	9.13（2.66）
関係維持（4項目）	11.19（1.65）	11.69（1.62）	11.55（2.00）
記号化（4項目）	11.40（2.33）	11.78（2.52）	11.46（2.41）

表２　大学入学後１年間の勉学および対人関係充実度４段階評定の各段階人数（割合％）

充実度	１．ぜんぜん	２．あまり	３．まあまあ	４．とても
勉学	5（6％）	22（28％）	37（46％）	16（20％）
大学内対人関係	0	11（14％）	28（35％）	41（51％）
大学外対人関係	6（8％）	7（ 9％）	27（34％）	40（50％）
家族との関係	3（4％）	14（18％）	43（53％）	20（25％）

る．本研究，報告（１）（２）においても愛着尺度との相関関係において「感情統制」は他の下位尺度とは異質であった．そこでソーシャルスキル(SS)得点については，「感情統制」尺度の項目を除いた５つの下位尺度で，合計点を出す方法を採用した（相川ら（2005），井森ら2010参照）．

大学１年入学時において「主張性」（「自分が不愉快な思いをさせられたときは，はっきりと苦情をいう」「友だちが自分の気持ちを傷つけたら，そのことをはっきりと伝える」などの項目からなる）を除き，他の５つの下位尺度「関係開始」（「相手とすぐにうちとけられる」「誰とでもすぐ仲良くなれる」など），「解読」（「表情やしぐさで相手の思っていることがわかる」「話をしているとき，相手の表情のわずかな変化も感じとれる」など），「感情統制」（「気持ちをおさえようとしても，それが顔にあらわれてしまう」（逆転項目）「困った時は顔にでやすい」（逆転項目）など），「関係維持」（「相手の立場を考えて行動する」「その場にあった行動がとれる」など），「記号化」（「表情が豊かである」「身振り手振りをまじえて話すのが得意である」など）において，相川ら（2005）の2～4年生男女1002名の平均得点との間に差がみられなかった．

同様に，２年進級時においても，「主張性」以外の下位尺度の平均得点に相川ら（2005）の平均得点と差はみられない．１年入学時と２年生に進級した時点で各下位尺度平均得点において差はない．また，「感情統制」尺度の項目を除いた５つの下位尺度の合計点であるソーシャルスキル(SS)得点でも差はみられない．１年入学時と２年生に進級した時点でソーシャルスキル(SS)得点および各下位尺度得点において差はない．ただし数値としては，１年入学時より２年生に進級した時点のほうが若干低くなっている．高校時代にくらべ，さまざまな出身地域のそれぞれの文化や習慣をもった人々と交渉する大学での生活のなかで，これまでのやり方ではうまくいかないことなどを経験したことが反映されているのかもしれない．

２．大学入学後１年間の学生生活〈勉学および対人関係〉の充実度自己評価

大学生活の充実度を「勉学」と「対人関係」（大学内の対人関係，学外の対人関係，家族との関係）の観点から自己評定したものを表２に示した．

勉学の充実度に関しては，大学１年次の成績をある程度反映していると思われる．３．まあまあ充実していたが37名（46%）と一番多く，次に，あまり充実していなかった22名（28%）であった．また４．とても充実していた人も16名（20%）と５分の１を占め，３．まあまあ充実していたと４．とても充実していたと答えた人を合わせると53名で，全体のほぼ３分の２が充実していたと評価していた．

大学内の対人関係の充実度に関しては，４．とても充実していたが，41名（51%）で半数を占めていた．次に，３．まあまあ充実していた28名（35%）であった．また，1．ぜんぜん充実していなかった人はいなかった．入学して，２年に進学するまでに，８～９割の学生が大学での友人関係を形成していると考えられる．

大学外の対人関係の充実度については，４．とても充実していたが，40名（50%）で半数を占めていた．次に，３．まあまあ充実していた27名（34%）であった．３，４の充実していた人の割合は大学内の対人関係での割合とほぼ同じであった．しかし，大学内の対人関係では1．ぜんぜん充実していなかった人はいなかったのに対して，大学外の対人関係では1．ぜんぜん充実していなかったが6名（8%）みられた．この大学外の対人関係が1．ぜんぜん充実していなかった人の多くは，２時間～２時間半かけ

て大学に通っており，アルバイトを含め，大学以外での活動をする時間が持てず，学外の人と交流ができなかったのだと思われる．

家族との関係の充実度については，３．まあまあ充実していたが43名（54%）と一番多く，半数を超えていた．次に４．とても充実していた20名（25%）であり，８割の学生が大学生になってこの１年，家族との関係が充実していたと評価していた．その一方，14名（18%）が２．あまり充実していなかった，また3名（4%）が1．ぜんぜん充実していなかったと評価していた．その理由としては，進学のため，実家を離れ，休み中にも帰れなかった．ボランティアやサークルで家族とあまり話す暇がなかったなどをあげている人がいた．

３．１年間の大学での勉学充実度，対人関係充実度自己評価とソーシャルスキル

１）大学での勉学充実度

３（まあまあ充実していた）群の割合が最も多い．

勉学充実度とソーシャルスキル下位尺度得点との関係についてみると，「感情統制」尺度においては勉学が２（あまり充実していなかった）群の平均得点が9.48と最も高く，３（まあまあ充実していた）群の平均得点9.11，４（とても充実していた）群の平均得点8.53であり，２群と３群の平均得点差には有意傾向がみられた($p<.01$)．それ以外の尺度においては２（あまり充実していなかった）群より３（まあまあ充実していた）４（とても充実していた）群の方が高かった．とくに，「関係維持」尺度では最も高い３（まあまあ充実していた）群の平均得点11.71と最も低い２（あまり充実していなかった）群の平均得点10.35の間には有意差がみられた($p<.01$)．

１．でも述べたように，「感情統制」尺度は，異質の尺度と考えられていたが，ここでも異質性が示された．勉学が充実していると，「感情統制」が低い傾向がある．「気持ちをおさえようとしても，それが顔にあらわれてしまう」（逆転項目）「困った時は顔にでやすい」（逆転項目）などで構成されているこの下位尺度は自己開示をしていない程度を測っているともとれる．そのように捉えると，「感情統制」が低いほど自己開示しているということになる．勉学が充実していると，対人関係において自分をそのままに出せるとかんがえられる．

一方，「相手の立場を考えて行動する」「その場にあった行動がとれる」などからなる「関係維持」尺度得点では，勉学充実度と明確な関連が示された．勉学が充実していると「関係維持」得点が高い．つまり，適切な行動をとりやすくなるといえる．また，「関係維持」の項目は授業に対する適切な取り組みを示す行動であることから，「関係維持」の高さが，勉学を充実させているとも考えられる．

なお，３群と４群の平均得点に関しては「記号化」尺度においては４群11.76，３群11.71と有意差はないものの４群が数値的には若干上回っていた．しかし，「関係開始」尺度では４群，３群とも21.01で同じ数値，「解読」「主張性」「関係維持」尺度では有意差はないものの３群の方が４群より数値的には若干上回っていた．つまり，「ソーシャルスキル(SS)」尺度の下位５尺度のうち，勉学が３（まあまあ充実していた）群の平均得点より４（とても充実していた）群の平均得点の方が，多少なりとも上回っていたのは１尺度のみであった．これは，勉学充実度は成績と深く関連していることから考えて，自分の成績にたいして謙虚な姿勢を示すことがより高いソーシャルスキルを導くことと関係していることを示しているのかもしれない．

その結果，「感情統制」を除く，５尺度の合計得点である「ソーシャルスキル(SS)」尺度得点において，勉学が３（まあまあ充実していた）群の平均得点が83.06と最も高く，次に４（とても充実していた）群の82.24と続き，２（あまり充実していなかった）群は74.00，１（ぜんぜん充実していなかった）群は73.60であった．そして「ソーシャルスキル(SS)」尺度得点では勉学の３（まあまあ充実していた）群と２（あまり充実していなかった）群の間に有意差が示された($p<.05$)．大学での勉学が充実しているとソーシャルスキルが発揮しやすいと考えられる．

２）大学内での対人関係

勉学が４（とても充実していた）群の割合が最も多く，１（ぜんぜん充実していなかった）群はいなかった．

大学内対人関係の充実度とソーシャルスキル下位尺度得点との関係についてみると，「感情統制」尺度においては勉学３（まあまあ充実していた）群の平均得点が9.33と最も高く，次に４（とても充実していた）群の9.27，そして，２（あまり充実していなかった）群7.92であったが，各群の間に有意差はなかった．また「主張性」においては勉学が４（とても充実していた）群の平均得点が17.27と最も高く，次に３（まあまあ充実していた）群の15.07，そして，２（あまり充実していなかった）群14.67であったが，この尺度得点においても各群の間に有意差はなかった．しかし，この「感情統制」「主張性」以外の下位尺度においては４群は３群より，３群は２群より平均得点が高く，群間にいくつかの有意差がみられた．「関係開始」では，４群の平均得点21.68と，３群の平均得点18.85の間に有意差（$p<.05$）が，また２群の平均得点17.00との間に有意差（$p<.01$）がみられた．「読解」においても４群の平均得点22.17と，３群の平均得点19.89の間に有意差（$p<.05$）が，また２群の平均得点19.67との間に有意差（$p<.05$）がみられた．「関係維持」では４群の平均得点11.71，３群の平均

表３　勉学・対人関係・家族との関係に対する自己評定とソーシャルスキル得点

		関係開始(8項目)	解読(8項目)	主張性(7項目)	感情統制(4項目)	関係維持(4項目)	記号化(4項目)	SS（感情統制除く）
	平均得点(SD)	20.02(4.6)	21.03(3.4)	16.13(4.0)	9.09(2.3)	11.19(1.7)	11.40(2.3)	79.69(12.7)
勉学	1.ぜんぜん	18.20	18.20	15.60	9.00	10.60	10.80	73.60
	2.あまり	18.09	20.17	14.74	9.48	10.35	10.78	74.00
	3.まあまあ	21.06	21.74	16.83	9.11	11.71	11.71	83.06
	4.とても	21.06	21.53	16.76	8.53	11.41	11.76	82.24
学内対人関係	1.ぜんぜん	－	－	－	－	－	－	－
	2.あまり	17.00	19.67	14.67	7.92	10.08	10.00	71.08
	3.まあまあ	18.85	19.89	15.07	9.33	10.89	11.04	75.63
	4.とても	21.68	22.17	17.27	9.27	11.71	12.05	84.88
学外対人関係	1.ぜんぜん	18.42	20.00	17.00	8.86	10.57	11.14	76.86
	2.あまり	20.33	20.50	17.00	8.50	10.17	9.83	77.50
	3.まあまあ	18.89	19.96	15.44	9.00	11.15	11.30	76.41
	4.とても	21.03	22.00	16.33	9.28	11.48	11.75	82.73
家族との関係	1.ぜんぜん	21.50	21.50	16.00	8.50	8.50	8.50	75.50
	2.あまり	21.23	21.54	16.77	9.31	11.69	11.92	83.23
	3.まあまあ	18.98	20.72	15.88	8.93	11.07	11.26	77.86
	4.とても	21.23	21.36	16.27	9.32	11.36	11.63	81.55

得点10.89，２群の平均得点10.08であり，４群と２群との間に有意差（p<.01）がみられた．なお４群と３群との平均得点の差に有意傾向（p<.10）がみられた．「記号化」でも４群の平均得点12.05，３群の平均得点11.04，２群の平均得点10.00であり，４群と２群との間に有意差（p<.05）がみられた．

その結果，「ソーシャルスキル(SS)」尺度得点において，勉学が４（とても充実していた）群の平均得点が，84.88と最も高く，次に３（まあまあ充実していた）群の75.63，そして２（あまり充実していなかった）群71.08であった．４群と３群および４群と２群の平均得点間に有意差がみられた（p<.01）．大学での対人関係が充実していることとこの期のソーシャルスキルと深く関係していることが示唆された．ただし，「主張性」に関しては他の４尺度に比べて，大学での対人関係の充実との関係は強くないと思われる．

３）大学外での対人関係

４（とても充実していた）群の割合が最も多いが，１（ぜんぜん充実していなかった）もみられた．

大学外の対人関係とソーシャルスキル下位尺度得点との関係については大学内での対人関係とは対照的に，全ての下位尺度において４，３，２，１の４群の平均得点間に有意差はみられなかった．ただし，「主張性」では１（ぜんぜん充実していなかった）群と２（あまり充実していなかった）群の得点が一番高い．そして，「主張性」以外の下位尺度では４（とても充実していた）群の得点が一番高い．しかし，その４群と１，２，３群との間には，「記号化」において４つの群で一番得点の高い４群22.00と一番得点の低い３群19.96の間に有意傾向（p<.10）はみられたものの，それ以外の下位尺度において群間に得点の有意差，有意傾向はみられていない．また，１，２，３の得点順位は下位尺度により異なる．「関係開始」「解読」「主張性」では３（まあまあ充実していた）群より２（あまり充実していなかった）群の方が得点は高い．いずれにしろ有意差はみられていない．

その結果，「ソーシャルスキル(SS)」尺度得点では，４（とても充実していた）群の平均得点が，82.73と最も高く，次に２（あまり充実していなかった）群77.50，そして１（ぜんぜん充実していなかった）群76.86，最後に３（まあまあ充実していた）群の76.41であった．「ソーシャルスキル(SS)」尺度得点においても４，３，２，１の４群の平均得点間に有意差はみられなかった．

大学外でのアルバイト等での対人関係の充実度は大学前期のソーシャルスキル自己評定とはほとんど関係していないと考えられる．ただ，４の大学外での対人関係がとても充実していた群は，有意差は示されてはいないが，他の群に比してソーシャルスキル下位尺度の「主張性」はそれほど高くなく，それ以外の下位尺度は高い．一方，２の大学外での対人関係があまり充実していなかった群はこれも有意差は示されてはいないが，「関係開始」「解読」「主張性」はかなり高いが，「関係維持」（「相手の立場を考えて行動する」「その場にあった行動がとれる」など），「記号化」（「表情が豊かである」「身振り手振りをまじえて話すのが得意である」など）が低かった．逆に，３（まあまあ充実していた）群は，「関係開始」「解読」「主張性」はかなり

低いが，「関係維持」，「記号化」は低くない．今後の研究で，この点を明らかにしていく必要があると思われる．

４）家族関係

３（まあまあ充実していた）群の割合が最も多かった．家族関係の充実度とソーシャルスキル下位尺度得点との関係についても大学外での対人関係と同様に，全ての下位尺度において４，３，２，１の４群の平均得点間に有意差はみられなかった．得点としては，「解読」「主張性」「関係維持」「記号化」の４つの下位尺度においては２（あまり充実していなかった）群の得点が４（とても充実していた）群の得点より若干高かった．なお，「関係維持」では２（あまり充実していなかった）群の得点11.69と１（ぜんぜん充実していなかった）群の得点8.50の得点差，および４（とても充実していた）群11.36と１（ぜんぜん充実していなかった）群の得点8.50の得点差に有意傾向（p<.10）が見られた．

その結果，「ソーシャルスキル(SS)」尺度得点では，２（あまり充実していなかった）群の得点が83.23と最も高く，次に４（とても充実していた）群81.55，そして３（まあまあ充実していた）群77.86，最後に，１（ぜんぜん充実していなかった）群75.50であった．なお.「ソーシャルスキル(SS)」尺度得点においても４，３，２，１の４群の平均得点間に有意差はみられなかった．

この期の家族関係の充実とソーシャルスキル自己評定とはほとんど関係していないと考えられる．家族との関係はあまり充実していなくても，その分友人関係を充実させていたと考えられ，ソーシャルスキル得点で，家族との関係が充実していた学生との差はない．ただし，家族との関係がぜんぜん充実していなかった群の学生は（３名ではあるが,）「関係維持」がやや低い傾向を示しており，対人関係の充実の基底に「関係維持」（「相手の立場を考えて行動する」「その場にあった行動がとれる」など）のスキルがあることが想定される．

まとめと今後の課題

１）ソーシャルスキル平均得点としては大学入学時点と１年後で変化がなかったことが示された．１年入学時において，「主張性」を除いて相川ら（2005）の２～４年の平均得点と差がみられなかったソーシャルスキル下位尺度得点は，２年進学時においても，個人では変動はあったものの，平均得点として差は示されず，１年と２年で変化はなかった．このことは，大学入学時にすでに，ソーシャルスキルをかなり身につけていることを示唆しているといえる．ただ，大学入学の１年間で，かなり上がった人もいれば，下がった人もいる．その要因を分析することで，ソーシャルスキルとは何か．親準備性としてのソーシャルスキルとは何かを探って行きたい．

２）大学生活に関しては，３分の２以上の学生が大学に入学してからの１年間，勉学が充実していたと回答していた．また，大学での対人関係についても８～９割の学生が充実していると回答していた．ほとんどの学生が，１年間にこれまでの高校を中心とした生活から，うまく大学生活への移行を果たしていたと考えることができる．

３）大学入学後１年間の学生生活の充実度とソーシャルスキルに関しては，大学での勉学充実度および大学内での対人関係の充実度が２年進学時のソーシャルスキル評定に大きく反映されていることが示された．つまり，大学入学後の１年間，勉学面で充実していたと感じていると，ソーシャルスキル得点は高い．また大学内での対人関係が充実していたと感じているほど，ソーシャルスキル得点は高い．一方，大学外の対人関係の充実度および家族との対人関係の充実度は２年進学時のソーシャルスキル評定と関連はみられなかった．つまり，大学外の対人関係の充実の程度および家族との関係の充実の程度により２年進学時のソーシャルスキル得点に差はみられていない．
大学で主体に学ぼうという姿勢が，友達•教師との積極的な交流を生み出し，この時期のソーシャルスキルを高めていると考えられる．また，逆に，勉学に充実感をもてない，主体的に学べていない学生にとって，大学内での友達・教師との交流は積極的なものとはなりにくく，ソーシャルスキルが上がらない要因になっていると思われる．大学内での交流はこの時期のソーシャルスキルのベースになっていると考えられる．

４）大学前期においては大学内での交流が中心であるが，大学後期になると，実習等で，社会のいろいろな施設•機関において，さまざまな世代，背景を持つ人たちとコミュニケーションの必要が生じる．そのときにソーシャルスキルにどのような変化が生じるのか．または生じないのか．今後の追跡調査により探って行きたい．

附記

本研究の調査に協力して下さいました受講生諸姉に感謝いたします．

引用参考文献

相川充　人づきあいの技術－社会的スキルの心理学 サイエンス社　2000

相川充　ソーシャルスキル測定についての課題と展望 東京大学大学院教育学研究科教育研究創発機構教育測定・カリキュラム開発講座 2005年度研究活動報告書（1）27－46　2005a

相川充　社会的スキルの国際比較は可能か 菊池章夫(編著)社会的スキルを測る：KiSS-18ハンドブック　川島書店　pp.166-172. 2007 V-1.

相川充・藤田正美　成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成　東京学芸大学紀要1部門56　87－93　2005b

Darden, C. A., & Ginter, E. J.　Life-skills development scale ― adolescent form: The theoretical and therapeutic relevance of life-skills. Journal of Mental Health Counseling, 18, 142－163　1996

Foster, S. L., Inderbitzen, H. M., & Nangle, D. W. Assessing acceptance and social skills with peers in childhood ― Current issues. Behavior Modification, 17, 255－286　1993

堀毛一也　社会的スキルとしての思いやり　現代のエスプリ, 291, 150-160　1991

堀毛一也　人あたりの良さ尺度　菊池章夫・堀毛一也（編）社会的スキルの心理学　168-176. 川島書店　1994

井森澄江　仲間関係の発達　井上健二・久保ゆかり（編）子どもの社会的発達 50-69 東京大学出版会　1997

井森澄江・岩治まとか　2010　女子大学生における親準備性の発達(1)－入学時のソーシャルスキルについて－　東京家政大学研究紀要　第50集(1)　p143-p149

井森澄江・岩治まとか　2010　大学前期の親準備性と学生生活(1)－ソーシャルスキルに焦点をあてて－　第19回日本パーソナリティ心理学会発表論文集

井上俊哉・大井京子・西村純一・井森澄江2005　親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅱ－PBIとIPAの尺度の再検討－2006

岩治まとか2005　青年期における養護性の検討　東京家政大学大学院文学研究科修士論文

岩治まとか・井森澄江　2010　女子大学生における親準備性の発達(2)－入学時の養護性について－　東京家政大学研究紀要　第50集(1)　p151-p158

岩治まとか・井森澄江　2010　大学前期の親準備性と学生生活(2)－養護性に焦点をあてて－　第19回日本パーソナリティ心理学会発表論文集

Riggio, R. E.　Assessment of basic social skills. Journal of Personality and Social Psychology, 5511, 649－660　1986

酒井厚　青年期の愛着関係と就学前の母子関係―内的作業モデル尺度作成の試み―　性格心理学研究, 9, 59-70　2001

Segrin, C. The impact of assessment procedures on the relationship between paper and pencil and behavioral indicators of social skill. Journal of Nonverbal Behavior, 22(4), 229-251　1998

庄司一子 社会的スキルの尺度の検討―信頼性・妥当性について― 教育相談研究29, 18-25　1991

杉村仁和子・石井秀宗・張一平・渡部洋　児童生徒用ソーシャルスキル尺度（SSI-M）開発研究報告書　2007

詫摩武俊・戸田弘二　愛着理論から見た青年の対人態度；成人愛着スタイル尺度作の試み,東京都立大学人文学報, 196, 1-16　1988

Trower, P. Toward a generative model of social skills: a critique and synthesis. In J. P. Curren & P. M. Monti (Eds), Social skills training: A practical handbook for assessment and treatment. New York: Guilford Press.　399-427　1982

和田実　対人的有能性に関する研究―ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成― 実験社会心理学研究31, 45－59　1991

和田実 ノンバーバルスキルおよびソーシャルスキル尺度の改訂 東京学芸大学紀要1部門 43, 123－136　169　1992

Abstract

The study intends to clarify how adolescent girls grow out of being under protection, gaining protecting capability during four years of campus life. The report surveys social skills of female students just beginning the second year in the university with relation to one-year experience in campus life. The subjects of this survey were 80 female students of a woman's university, who were examined at the time of entering the university via a questionnaire sheet about attachment, nursery and social skills. On beginning the second year, the students were examined again by a questionnaire sheet including substantiality of the study in the university and the personal relationship in the university, outside the university and in a family, as well as nursery and attachment.

It was found the score on social skills did not change on the average during the year after the entering of the university.

A correlation was found between substantiality of the study and social skills. The students grouped into the moderate substantiality got a higher score on social skills than the students grouped into the poor substantiality.

The substantiality of personal relationship in the university was explicitly related with social skills. The students grouped into the good substantiality recorded a higher score than the students grouped into the moderate and the poor substantiality.

Yet the substantiality of personal relationships outside the university and in the family was not found related with social skills.

In summary, it was suggested the substantiality of the study and the personal relationship during one year of campus life was reflected in the score on social skills at the beginning of the second year in the university.